

## 第13回 現代世界の系統地理的考察

## ■■ 資源と産業編 ■■

## 世界の食料問題に目を向けてみよう

監修・講師

沼畑早苗

## 学習のねらい

食料の安定した確保は、人類がかかえる最大の課題の一つである。世界全体でみると、全ての人を養うのに十分な食料が生産されるようになったにもかかわらず、依然として世界では8億を超える人々が慢性的な栄養不足の状態にある。豊富な食料に恵まれた地域もあれば、食料不足に苦しむ地域があるのはなぜだろうか。発展途上国や先進国、日本について、それぞれの地域がかかえる食料問題の状況と原因を理解し、問題を解決するためには、どのような国際協力が必要か、また個人が生活の中で実行できることは何かを具体的に考えよう。

## 今回のポイント

- 発展途上国の食料問題
- 先進国の食料問題
- 日本の食料問題

## ■■ 発展途上国の食料問題 ■■

発展途上国では多くの人々が食料不足や飢餓に直面している。特にサハラ砂漠以南のアフリカの国々では問題が深刻である。出生率が高く、人口増加に食料生産が追いつかず食料不足になる国もあれば、干ばつや病害虫などの自然災害によって、食料生産量が低下している国もある。内戦や紛争はしばしば難民を生み出し、農業の衰退を招く。また、モノカルチャー経済で、カカオなどの商品作物の輸出に頼る国々は、自給用作物の生産が圧迫され、食料が不足することがあり、商品作物も価格変動の影響を受けるため、人々の生活はきわめて不安定である。

発展途上国の食料問題を解決するために、先進国が果たす役割は大きい。災害など緊急時には迅速な食料援助が必要だが、根本的な問題解決のためには、食料を自給できるような体制作りを支援する必要がある。日本の青年海外協力隊もウガンダなどで、ネリカ米の栽培普及に向けた農業支援に取り組んでいる。

## ■■ 先進国の食料問題 ■■

先進国は世界の食料生産と消費において、大きな比率を占めている。合理的で生産性の高い農業が発達した先進国の中には、食料を大量に生産し、輸出している国も多い。一方で、食生活が多様化しているため、世界中から食材を輸入している。肥満の問題が深刻化したり、大量の食料が食べられずに捨てられている。

先進国における穀物の消費は、食用としてばかりではない。特にとうもろこしは、家畜の飼料や、バイオエタノールの原料としても大量に消費されている。経済的に豊かになると肉類の

消費が増大し、飼料としての需要が増える。また、地球温暖化対策などからバイオエタノールの需要が高まると、原料としてのとうもろこしの消費が増大する。こうした競合により穀物価格が上昇すると、貧しい人々の食生活がおびやかされることになる。人類が共存するため、先進国の食料消費のあり方を見直し、食料の公平な分配に向けて努力する必要がある。

### ■ ■ 日本の食料問題 ■ ■

日本は世界一の食料輸入国である。第二次世界大戦後、日本人の食生活は大きく変化し、パンや肉類の消費量が増加した。主食である米の自給率は現在でもほぼ 100% であるが、パンの原料となる小麦や、家畜の飼料であるとうもろこしなどは、その多くを輸入に頼っている。そのため、現在、日本の食料自給率は約 4 割と、先進諸国の中で最低水準にある。

食料自給率が低いと、外国の産地や国際市場の影響を直接受けるため、食料を安定的に確保できなくなる懸念がある。食料自給率を高めるためには、国産の農産物を積極的に選択するよう消費者の意識を変える必要がある。また、日本の農業は高齢化が進み、担い手不足が深刻化しているが、長期的な展望にもとづいて、食料を国内で安定的に生産する体制を整える必要がある。